

左千夫先生への追憶

石原純

青空文庫

左千夫先生のことを憶うと、私にはいかにも懐かしい気分が湧いてくる。あの大きな肥ふとった身体からだ、そしてみなりなどにかまわない素朴な態度、その平淡ななかに言い知れぬ深いところを湛たえて我々に接せられたことなどに対し、私はどんなに懐かしきを感じているかわからないほどである。

「馬酔木あしび」がはじめて発刊せられたのは明治三十六年のことであつた。それ以前から根岸ねぎ派しはの歌に親しんでいた私はこれを嬉しく思いながら、先生のことを想像していた。その時分は大学の学生であつたが、まだ見知らぬ人をいきなり尋ねて行つてよいかどうかを思いまどいながら数箇月を過ごしてしまつた。そのうちに毎月の歌会が先生の宅で開かれるようになったので、この年の秋過ぐるころに、私ははじめてその歌会の日を訪ねて行つた。牛乳屋の硝子戸ガラスのはまつた入口のかたわらに、少し奥まつたところに格子戸こうしどの玄関が別にあつた。そこで案内を乞いながら私ははじめて先生のあの懐かしい面に接したのであつた。この折りに見た炉ろをきつた座敷や、愛蔵せられていた茶釜や、無む一塵いちじんの額面や、それらは今でも私の眼前にちらついて見えるようである。そして先生のおもかげと結びついて私の脳裡のうりに消されずにのこっている。

本所茅場町の先生の家は、もう町はずれの寂しいところであつた。庭さきの牆の外にはひろい蓮沼があつて、夏ごろは蛙が喧ましいように鳴いていた。五位鷺や葎切りのなく声などもよく聞いた。そこで牛を飼つていながら、茶を楽しみ、歌や文学や絵画を論じていられた先生は、実に高尚な趣味に徹した人であつた。雑然たる都会のなかに住んでいた私には、暇を見つけては先生のもとに行つて、その閑寂な趣味のなかに浸ることのできるのを、この上なく嬉しく思つたことであつた。いつもあまりながく話して、知らない間に夜をふかしてしまうこともしばしばあつた。まだ電車などまるでなかつたころであつたから、本郷の家まで帰るのに、もうひっそりと寝しずまった町々を歩いて来たのであつたが、時々あまりに遅い時間になつてしまつて、そのまま泊めていただいたことなどなかなかあつた。

趣味に徹していた先生は、そうであるからと言つて趣味に溺れる人では決してなかつた。閑寂をもとめ平淡を愛しながら、なお決して世を離れるような退嬰的な態度をとらしめるに至らなかつた所以はここにあると私は思う。あれほど淡雅な趣味を好んでいた先生が、他面においてはなほだ進取的な若々しい気分や、執拗な強い自信をもつて、実世間につき進んでゆかれたことなど思うと、むしろ不思議なほどである。この性格において私は先

生の偉大さを切実に認めるとともに、そこに少しの厭味いやみをも伴うことなく、どこまでも懐かしさを感じしめることを、まことに貴とくも思うのである。

歌論に対する先生の自信はおそらくすべての人々が異常な感をもってそれに対したほどであった。先生のころにはそれが絶対のものであったので、当時世間でもてはやされていた歌などには、まるでその価値を認めずに罵倒ばとうされた。その議論に熱烈であったことはまことに驚くべきほどである。私はあぶらぎつて肥こえていた先生の体格が、この強い確信を燃えたたしめる素質となっていたのだと思っている。正岡子規まさおかしき子の没後、先生がひとりその門弟のなかに抽ぬきんでて、根岸派歌会の中心となつてそれを背負つてゆかれたことも、年齢などの関係もあつたには違いないが、また主としてこの強味をもたれていたからであると思う。中年になつてから、あれだけの小説を書かれたのも、やはり同様の性格に基づくもので、そのころの小説に対する自信もかなりの程度のものであった。

先生が我々よりも二十年も年上でありながら若い気分をもつていられたことは随所に見られた。本当に友だちのように我々を遇せられていた。歌会するときなど、席上の歌作に苦しんでいると、いつも先生は元氣な声で、「そんなことではだめだ、僕はもう数首できたよ」と言つては、我々を励まされた。また私が大学で物理学を専攻していたので、先生は

よく物質の分子とか電子とかラジウムとか、それから地球や天体のことなどを、非常な興味をもつて私に尋ねられるのであった。そしてそれらのふしぎな現象をいろいろと心に描きながら、自然の幽幻なありさまや、人間の知識の究極するところの深さに感嘆しておられた。これらのことは、一面には先生が近代教育を受けない素朴な性質をもっておられたことにもよるが、それでありながら先生が熱心にこのような知識を解しようとせられたところに、実に若々しい進取的な気質を私は観取しないわけにはゆかないのであった。

自然に対する驚異、それは本当に敬^{けい}虔^{けん}な心から生まれる。なまなかの学問をしたものはかえつてそういう心を失つて、自分の浅薄な知識にたよりたがるのである。先生にはそういうことが絶対になかったので、最も深く自然を愛し、これを讃美せられた。明治四十三年五月にかの有名なハリー彗^{すいせい}星が太陽に近づき、遠くその尾をひいて、それがわが地球にも触れると言われたとき、先生はちょうどその折りにできあがった茶室唯^{ゆい}真^{しん}閣^{かく}に我々を待つて、このまれな日の感慨を深められた。そのとき書かれた文には次の句がある。

（五月十九日） 七十五年ごとに現わるべき彗星のこの世界に最も近づくという日である。わが方丈の一室もようやく工を竣^おえ、この日はじめて諸友をここに会した。……十九日はもとより我々の忘るることあたわざる日である。今またこの日をもつてこの会を

なす。今後予をしてさらにこの日を親しましめるであろう。予は永久に毎月この日をもつてこの一室に諸友の来遊を待つことと定めた。

彗星来降の実況は晴天なるにかかわらずついに何ごとをも感ずることができなかつた。夜に入つてはただ月白く風爽さわやかに、若葉青葉の薫かおりが夜気に揺ゆらぐを覚おぼゆるのみである。会は実におもしろかりし樂しかりし。

ここで十九日は我々の忘るることあたわざる日であると書かれたのは、正岡子規子の命日に当たるからである。このとき我々は夜を徹するばかりに語りふけて、それから月明のふけわたつた静かな街路を、何ものかの変異を心に予感しようとしながら、それぞれの家に向けて歸つたのであつた。

偏僻へんぴなところにあつた先生の家のすぐ前には、汽車の高架線があつて、錦糸堀きんしほりの停車場の構内になつていた。夜分静かに話にふけてっていると、汽車がごうごうと通り過ぎてゆく。沼地につづいたこのあたりの軟らかい地面を揺らがして、地震のようにぐらぐらする。私はいつもの寂さびた心地のなかに、急に近代的の刺戟しげきを感じさせられるようにも思つた。しかしそれにも慣なれてくると、今度はかえつてそれもなくてはならぬもののように平氣になつてしまつた。先生の立てられた渋い茶を味わつて、こうして我々は現代に生きていた

のである。世の人たちは万葉崇拜まんようすうはいをいたずらに古めかしい趣味でもあるように見なしていた。先生は万葉精神の体现はたとえ一般人には認められなくとも、それを理想とする少数の我々がここにあるということは、やはり現代思潮の一部として否定すべからざる事実であるとも言われていた。それを今思うと感慨がふかい。

「馬酔木」あしび時代には、雑誌の編集はほとんど先生一人の仕事であつた。それに対しては非常に熱心でいられたのかかわらず、発行の遅れないときにはないほどであつた。きょうはぜひやつてしまわなくてはならないと言いながら、訪問者でもあると、それを断わりきれずに、やはりゆつくりと茶を飲んで話していられた。先生のゆったりした、しかも愛情のみちた性格がこういうところに遺憾なく覗うかがわれる。第二巻、第三巻のころには印刷所が京橋にあつたので、雑誌のできあがつた日には、そこへ出かけて行つて雑誌を自分でうけとり、それから私の本郷の寓居ぐうきよへ立ちよつて、一緒いっしょに発送をするのを例とせられていた。真間ままで歌会をやつて手古奈てこなの祠ほこちに詣でたことや、千葉の瀬川氏の別荘へ行つて歌をつくつたことや、東京湾の観艦式かんかんしきを見るのに川崎におもむいてそこで泊つた折りのことや、多摩川たまがわべりの寺内で鮎あゆを賞したときのことなど、私には忘れられない記憶となつて残っている。そして袴はかまの股ももだちをとつて田舎道いなかみちを歩いてゆかれた先生の姿など眼のまえに浮か

んでくる。甲州御嶽みたけの歌会には私の都合で行をともしることのできなかったのを、今でも遺憾に思っている。

明治四十五年の三月に私が欧州へ向けて留学の旅に出かける折りに、送別の会を先生のもとで開いていただいた。先生の健康な身体をそのとき限り見ることができなくなろうとは、かりにも予想し得ないことであつた。翌年先生の訃報ふほうを私はスイスのチューリッヒで受けとつたのであつたが、そのとき私はその山腹の下宿の高い窓から、杲然ぼうぜんとして町の向こうの青い湖水の面を見おろしながら、孤ひとり離れて遠い思いに浸らないわけにはゆかなかった。私はやがて故国に帰つて先生に話そうと思つていたいろいろな事がらを、そのままにしないでならないようになってしまったことを、その時どんなに憾うらんだかしれない。

西洋の文字を知らなかつた先生は、欧州にいる私に対する手紙の宛名を書くのに、いつも斎藤君わづらを煩わづらわさねばならなかつたが、そういう面倒をあえてしては、いつも真情のこもつた手紙をはるかに送られたことを、私はまことにありがたいと思つている。ドイツから送つた私の歌に対して、「アララギ」第六卷第三号で「歌の潤うるおい」という歌論のもとで、大いに褒ほめられ、それが先生の最後に近い歌論ともなつたことは、私にとってまことに感

銘のふかいところである。それはこのころ斎藤君などが新らしい道に進もうとされて、先生からいくらか離れるようにも見えることを寂しく思われたのにもよることと思うが、ともかく私はこのことを忘れるわけにはゆかない。

先生が逝^ゆかれて、もう七年も過ぎたかと思うと、今さらに年月の経つのがはやい気がする。先生がいままで達者でいられたならどんなであろうなどとも思っていると、近眼鏡を二重にかけた先生のおもかげが眼前にありありと見える気がする。

（一九一九年六月「アララギ」）

青空文庫情報

底本：「随想全集 第九卷」尚学図書

1969（昭和44）年11月5日発行

底本の親本：「随筆集 夾竹桃」文明社

1943（昭和18）年7月20日発行

初出：「アララギ」アララギ発行所

1919（大正8）年7月

※「本所茅場町」は当時の東京市本所区茅場町、「本郷」は同じく東京市本郷区です。

入力：高瀬竜一

校正：フクポー

2018年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

左千夫先生への追憶

石原純

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>